

外国語教育の現状と課題

ー 『Hi, friends!』 を取り巻く現状とその活用を通してー

平成 24 年度鳴門教育大学小学校英語教育センターシンポジウム基調講演

直山木綿子 (NAOYAMA Yuko)

文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター
研究開発部 教育課程調査官

こんにちは。今、ご紹介をいただきました、直山と申します。今から 75 分間、2 時半までお時間をいただいて、「外国語教育の現状と課題ー 『Hi, friends!』 を取り巻く現状とその活用を通してー」の題でお話をさせていただきます。このシンポジウムは、「『Hi, friends!』 を使った授業の工夫」ということが大きなテーマとお聞きしていました。それに当たって、「この『Hi, friends!』 を作成した意図や、込めた思いなどを話してください」とお声掛けをいただきました。実は『Hi, friends!』 を作って 1 年半、各学校でも半年ご活用いただいているのだけでも、『Hi, friends!』 の意図や、その作成の経緯については、どこでもまだお話ししていないのです。それは「必要ない」と自分で思っていたからです。「なぜ『Hi, friends!』 ができたのか」など、「そのようなことをお話しすることが、先生方にとっていいか」ということが、非常に自分で疑問だったので、『Hi, friends!』 が皆さんのお手元に届いてからも、その話はどこでもしていない。このお話をいただいたときも、「そうは言ってもらったけど」と思いつつのこのタイトルにしています。

しかし、私は昨日、とある研修会でお話をさせてもらった。私はこの頃、外国語活動のことについてお話しさせてもらう時に、「『Hi, friends!』 をこんなふうに使ってください」「『Hi, friends!』 の中身ってこうなってますよ」というお話をたくさんしているのです。その研修では、『Hi, friends!』 の内容等について 90 分ほどお話をさせてもらう前に研究授業がありました。担任の先生と ALT の方が授業をされたのです。私の話が終わった後、司会者の方が、フロアの皆さんに「質問ありませんか」と聞かれたら、授業をされた ALT の方がぱっと手を挙げられた。そして、その方が「どうして英語やるんですか」と聞かれた。私は「今、24 年度やで」と思いました。そのような質問は、21 年度によくいただいた質問だったからです。

私が文部科学省に 21 年度に寄せてもらった時には、いろいろな地域での研修会でそのような質問が多かった。「なぜ外国語活動をしなければいけないのか」「なぜ担任がしなければいけないのか」「国語教育が先ではないのか」「なぜ今、外国語教育を小学

校でやらなければいけないのか」という質問を、21年度はたくさんいただきました。しかし、22、23年度と進むにつれ、そのようなご質問は出なくなり、皆さんが求められるは、「明日の授業で使える活動」「明日の授業でできる工夫」になり、私もいろいろな地域での研修でそのようなこととお話してきました。

昨日、担任の先生ではなくてALTが私に聞いたのが、非常に私には心地よいショックだった。そして、私なりに答えた。その後、ALTが私に言ったのは「直山先生、21年度にあなたはこのことを説明したかも知れないけど、ここにいる先生は、一番原点である『何で小学校で外国語活動をするのか』っていう原点を知らないよ」と。「そのようなことを知らないで、明日の活動をやっても、だめだと思う。だから僕は、あえて今日、聞いた」と言ってくれました。それを聞いて「有り難い」と思ったし、「今日、ここで『Hi, friends!』を大きくテーマにしてもらったから、『Hi, friends!』のことについてきちんとお話をしよう」と思いました。「原点に当たる」ということです。

『Hi, friends!』の原点に当たる前に、やはり「原点に当たる」ということで、この記事をご覧ください。9月9日に、このような記事が『日経新聞』から出ています。ご覧になった方もいらっしゃると思うけれども、1社しか出ていないので、それほど世間は大騒ぎをしなかった。何社もある中で1社だということですが、見えにくいので拡大すると、このような訳です。「小学校4年生以下でも英語必修の検討」。最初の見出しの4行ほどに書かれていることを拡大します。このような内容です。お目通しください。お目通しいただきましたか。ここに書かれていることは、3つあります。まず、文部科学省が、「低学年から英語を必修にする検討を始める」と書いてある。2つ目は、文部科学省が、「早い段階からコミュニケーション能力を高める必要があると判断した」と書いてある。最後に、「専門家会議を設けて研究する」と書いてある。この3つ書いてあることのうち、少しだけ事実なのです。そのことを今からお話ししていきます。

文部科学省が、25年度の概算要求を出しました。その中に「初等中等教育充実」という枠組みに、たくさん項目があり、その中に「将来的な外国語教育のあり方に関する調査研究事業」という項目で、2,500万円を計上しています。その内容を拡大すると、これです。お目通しいただけますか。今、見ていただいているものは、文部科学省のホームページにあがっています。メモを取ってもらわなくてもあがっていて、ネットで見ることができる資料です。この記事を見て、新聞社が反応したのでしょうか。しかし、どこに「専門家会議を立ち上げる」と書いてありますか。どこに「必修の検討を始める」と書いてありますか。

実はこの資料の他に、もう1点あります。スクリーンの黄色い部分です。拡大します。調査をすると書いたのだけれども、どのような調査をするのかという例を6つ挙げています。恐らく新聞では、この例のうちの「外国語教育の開始年齢」「外国語活動の位置づけ」という2つに反応して、「小4より以下で始める」あるいは「外国語活動ではなくて教科化」のようなことが書かれたのだと推察します。しかし、これらの資料を見ていただいたとおり「必修にする検討を始める」などと書いていないです。「専門家会議など来年度からやる」とも書いていないのです。これから、このような記事がたくさん出てきます。たくさんのさまざまな情報が飛び交ったときに、何が正しくて何が誤りなのかということ、きちんと見極めてほしいと思っています。そのため

には、「原点に当たることが大事」だと思っています。この度の記事の原点は、文部科学省のホームページにあがっている概算要求の資料です。

昨年度から、学習指導要領が全面実施になったところです。しかし、この数年後には、次の学習指導要領の検討が始まるのです。それは毎度のことです。学習指導要領を作るのに時間がかかりますね。ですので、審議会で次期学習指導要領について検討されていくのです、数年後に。その時に必ず出て来るのが、この「外国語活動」だと思っています。今後の外国語活動には「4つの可能性」があります。1つは「現状維持」。2つ目は「教科化」です。3つ目は「学年を下ろす」。そして最後は「縮小」です。しかし、この4つ目の「縮小」は、非常に可能性は小さい。なぜなら、これだけ労力とお金と時間をかけて導入したものを、「じゃあ、6年だけ」「時数を減らします」などということはなかなかないと考えます。しかし、先の事だし、100%ないとは言えないですね。

あとの3つですね。今、研究開発学校でも、毎年1校あるいは2校ぐらいに研究していただいているのです。それでは少ないから、調査する学校を増やすということなのです。そこで、「小学校で早くからやることでどれだけの効果があって、どのようなカリキュラムだといいのか」「教科にすることにどれだけの意味があるのか」ということを、研究いただくんですね。その数を増やして調査をするというものです。この「教科化」と「学年を下ろす」などという話は、今後、何度も新聞に出て来るでしょう。その時に、「必ず文部科学省が発信しているものを、原点を見てほしい」と思っています。そのことを先にお話ししておきたいと思いました。

ただ、「教科化」は、触らなければいけないものがたくさんあるのですね。先程、理事長先生がおっしゃっていました。「鳴門教育大学では、外国語活動を必修にして学生が勉強して、教員試験を受けられる」と。確かに増えて来ているのです、大学の教員養成課程で小学校の外国語教育についての講座が。しかし、必修にしている所は、それほど多くはまだないのです。大学で小学校の外国語教育のご指導をいただける先生が潤沢に、そして、その先生方の御力がどれだけあるかということが、非常に影響してきます。そこも視野に入れておかなければならない。例えば「学年を下ろす」というのも、小学校の教育課程全体を観なければいけない。「どこに時間を取るか」ということも、また検討していかなければいけないのです。ですから、これは「外国語教育だけの問題ではない」ので、それほどすんなりいかないということです。「研究開発学校で、小学校での外国語教育の可能性や有効性が重々に検証されない」と思っています。

では、今日は『Hi, friends!』に込めた思いということでお話をしていきますが、「思い込みではない」とうこと。直山の思い込みではないからね。まず、発端はここです。平成21年度の秋に、「事業仕分け」をたくさんの方々がニュースでご覧になった、耳にされたはずです。文部科学省が出した平成22年度概算要求の中に「英語教育総合プラン」というものがあつたのです。英語教育に関するものです。それが「事業仕分け」で「全部廃止」になったのです。その中に、実は、23年度用の『英語ノート』の印刷・配布代が含まれていました。ですから、「英語教育総合プランが廃止」になると同時に、23年度の『英語ノート』の配布が途切れることとなります。

その時に、評価をされた方々のコメントはいろいろあつたのですが、このような意

見もあったのです。「英語教育をもう一度見直すべきだ」「見直した上で、小学校での導入を議論すべき。それまでは、各学校の主体性に任せるべき。総合的な学習の時間のような、学校の実態に合わせて学校が実施するものにすべき」という意見です。もうこの時、すでに学習指導要領が出ていたけれども、このような意見があったのです。

さあ、23年度新学習指導要領全面実施なのに『英語ノート』が配られない。どうしようかということで、私が所属している外国語教育推進室で「どうする」と考えました。これは、先生方から『英語ノート』が必要だという意見が出ない限り、こちらとしてもどうすることもできない。すると、有り難いことに、先生方、学会、校長会から「23年度新学習指導要領全面実施のときに『英語ノート』がないなんて、どういうことや」というお声をたくさん頂戴しました。そこで、「23年度、全面実施1年目は、せめて『英語ノート』を配れるようにできないか」ということで折衝し、「23年度までは配布」という形になりました。

しかし、事業仕分けというのは政治判断ですから、100%覆すことは不可能だったのです。24年度以降、『英語ノート』の配布はない。全面実施で1年間だけです、配布があるのは。ありえない。だけれども、『英語ノート』は廃止なのです。そこで、『英語ノート』ではなかったらいいのです。そうでしょう。『英語ノート』が廃止になったのだから、『英語ノート』ではない、違うものという論が成り立ちますね。そこで、私が所属する外国語教育推進室で、新しい教材を作成することにしました。『英語ノート』は非常に素敵な教材だったけれども、21、22、23年度と使っていた中で、やはり「ここはどうなのか」「ここはこうの方がいいんじゃないの」と、幾らか声が出てきました。21年度文部科学省「外国語活動における教材の効果的な活用及び評価の在り方に関する調査研究事業」校で、『英語ノート』を活用した授業が行われました。その報告から、『英語ノート』の良さを引き継ぎ、課題を解消したものにしようと考えた次第です。

ただ、21年度から『英語ノート』をお配りし、22年度には99.4%の学校が『英語ノート』を要求されました。99.4%の学校が、『英語ノート』を隅から隅まで使っているとは限りませんし、隅から隅まで『英語ノート』をやってくださいと言っていました。しかし、99.4%の学校が要求されたということは、99.4%の学校が何らかの形でお使いということです。これだけたくさんの学校に使っていただいている、まだまだ『英語ノート』に慣れる、慣れないという段階で、内容がすべて変わってしまうのはいかなものかと考えました。そこで、『英語ノート』を多くの学校にご活用いただいていることを踏まえて新教材を作るということになりました。

『英語ノート』の良さについては、一人一人の児童に配布されること。「お持ち帰り出来る」ということは、「子どもが書きこみができる」ということ。「書ける」ということは、「子どもの学習の足跡」になる。ということ、これは、「評価に結びつく」ということです。ですから、児童一人に1冊ずつ配布としました。次に、デジタル教材がよいということ。それから、『英語ノート』の後ろには、子ども用の絵カードが付いていましたね。先生方にすれば、忙しい中子どもに1枚ずつカードを作るのは大変ことです。ですので、カードを後ろに付けることにしました。この3つの『英語ノート』の良さは、必ず引き継ぐこととしました。デジタル教材があると、担任の先生お一人でも授業がしやすい。「英語がちょっと苦手やな」という先生も、それを使って授業を

進めていただけるとのことです。

次は、改善しようと思ったことです。4つあります。まず先生方からのご意見は、『英語ノート』の単元終末の活動を工夫してほしいというものです。『英語ノート』の単元終末の活動は、「スピーチが非常に多い」、「日本語のスピーチもなかなか大変な子どもなので、英語のスピーチだともっと大変」というご意見が多くありました。では、単元終末の活動を見直そう。それから、活動の配列についても、もう少し先生方が授業の流れが分かりやすいものにしようではないかと考えました。さらに、教材の準備がもっと楽なように、デジタル教材にもっと絵カードを入れられないか。もう一つ大きな改善点は、この教材のコンセプトを明確にすることです。そのコンセプトについては、後の教材のタイトルのところでお話ししたいと思います。また、「先生用の指導資料が細か過ぎて読みにくい」という意見も多かったです。「指導資料に英語が多すぎる」という意見もありました。このような経緯で新しい教材を創ることになりましたが、このような有り難い機会はないと前向きにとらえ新教材作成となったのです。

ところで、これらの改善点については、次のように考えました。単元終末の活動は、より子ども同士でコミュニケーションが図れるものにする。付属のデジタル教材の内容も充実していく。先生方は忙しいので、様々な外国の資料などを探されるのは大変だろうということで、動画を入れることにしました。先生方が教材を作られる労力を少しでも軽減するため、絵カードをデジタル教材に増やしています。デジタル教材でいろいろな活動が、自由にできるようにもしています。つまり「もっと先生方が自由にアレンジしてください」というメッセージを出したわけです。そして、指導書については、ALT とのチームティーチングから、担任単独で行う指導に全部変えています。また、授業中にその指導案を見て授業しやすいように、1時間1ページに指導案を納めています。このような具体をまず考えて、新教材作成に、昨年4月からかかっています。ただ、実際にイラストなどの細かいことが動き出したのは、昨年7月からです。

これは、皆さんのお手元に届いている『Hi, friends!』です。先程、理事の先生とお話をしていた時に、「なぜこのタイトルなのか」とお尋ねになりました。『英語ブック』や『Activity Book』というような考えもあったのですが、新教材はその在り方、コンセプトをはっきりしようと思いました。これは、子どものための教材なのです。子どもが活動で使うための教材なのです。そこをはっきりしました。ですから、子どもが“Hi!”と挨拶し、「友達になろうよ」ということで、『Hi, friends!』という子どものセリフに変えたのです。

例えば、『Activity Book』もよかったけれども、これは、その教材の機能を表した言葉でしょう。子どもにとって、この教材がどのような働きを持つのか、そのようなことを子どもは考えて、教材を使うでしょうか。ですから、子どもが使う言葉で、そこに外国語活動の趣旨を込めてタイトルにしたいと思い、『Hi, friends!』としました。friends です。『Hi, English!』ではありません。『Hi, kids!』ではないのです。私から、子どもにむかったら『Hi, kids!』だけでも、お友達同士で、子ども同士が言わないといけないから『Hi, friends!』なのです。子どもに向き合ってほしいのは、相手なのです。目の前の人なのです。言語は、人に向き合うための手段なのだから。

さあ、この『Hi, friends! 1』、最初のレッスンがこのページですね。もう使っていた

だいていると思いますが、あの女の子が「さくら」です。男の子が「たく」です。「さくら」という名前は、日本の国花の一つが桜なので、「さくら」にしました。適当につけている訳ではない。日本の花だからです。他の三人の子どもたちは、「ひかる」、「ともえ」、「あい」です。女の先生が、この5年生の5人の学級担任の「田中ゆみ」先生です。男の先生も、この5人が通う「みどり小学校」の先生です。ところで、**Do you know why his name is Taku? Why is his name Taku? Who named him? Of course, me, I did.** 「さくら」は、日本の花で「さくら」にしましたよね。

私は、初めてで合う子どもたちとよく授業をさせていただくことがあります。そこで、自己紹介をするんですね。まず、自分の好きなものを紹介していくんですね。自分の好きなもの、黒板にアイスクリームの絵を描いて、“**I like ice cream.**”とジェスチャーを付け、表情豊かに言うと、子どもたちは十分理解します。次に、猫の絵を描きながら、子どもたちが「猫や!」と言う。**That's right. I like cats. But I don't like ..., I don't like No, thank you. Look at me, O.K.** 皆さんは、突然子どもですよ、いいですか。突然先生になったり、突然子どもになったりしないといけないので、忙しいね。すみません、ついて来てください。**So, I like ice cream. I like cats. But I don't like No, thank you. Look at me. I don't like What's this?**

フロア：**Swimming.**

Very good. I don't like swimming. みんなに聞いてみよう。**I don't like swimming** の人は。では、**I like swimming** の人は。**Wow, many, many, many** ね。**OK. So, I like ice cream. I like cats. Ice cream, wow, very nice, very yummy. Cats, very cute. But, one more. I like ..., more and more, more. What I like, I like ほにやらら. I like ほにやらら. Hint, please?**

フロア：**Yes.**

Hint please?

フロア：**Hint, please.**

OK. 4つラインがあるので、1つめのラインの上に大きくSを書きます。I like ほにやらら. What's this? Hint, please?

フロア：**Yes. Hint, please.**

OK. 4つラインがあって、最初のラインの上にSが書いてありますが、4つめのラインの上にPを書きます。I like ..., wow, very much. What's this?

フロア：**SMAP?**

疑わないでよろしい。**What's this?**

フロア：**SMAP.**

That's right. I like SMAP very much. So, everyone, five members in SMAP. Number one member. Number one member は?

フロア：**木村拓哉。**

Yes, I like Kimutaku very much. So cool, so handsome. I like Kimutaku. So, everyone, what's his name?

フロア：**たく。**

That's great. 「たくや」とするのはナンセンスでしょう。ですから、「たく」にしました。小学校の先生が悩まれるのが、ローマ字のヘボン式や訓令式です。そこで、一応、

「ち」が入ったり、「ちゅ」「ちゃ」などが入らないような音の名前にしています。

では、また表紙に戻ります。ここに『Hi, friends!』への思いを込めています。3人の子どもたちが学校から出て来ます。その一方で、「たく」と「あい」は船に乗っています。3人の子どもが船に乗り、5人でこれから船旅に出掛ける場面を描いています。3人の子どもが船に向かう道の周りには、りんごの数を数える子、バスケットボールをする子、Tシャツを作っている子がいます。これらの活動は、『Hi, friends! 1』の中に設定されている活動です。レッスン3ではりんごの数を数える、レッスン4ではバスケットボールが出てくる。レッスン5では、実際にTシャツを作ります。このあと有田先生(実践発表者)が、実践でTシャツを作られたお話をされますね。『Hi, friends! 1』で出会う活動の中を通して、船旅に出るという設定なのです。

『Hi, friends! 2』です。5人を乗せた船です。5人の子ども以外に、子どもが増えています。誰がいる。フィンランド出身のアレクシー、韓国出身のキム・ソヨン、ブラジル出身のマリアがいます。この子たちは、『Hi, friends! 1』に出て来た外国の子どもたちです。すっかり5人の子どもたちと仲良しになったので、一緒に船旅に出掛けます。後ろには桃太郎がいます。『Hi, friends! 2』のレッスン7で出てくる桃太郎も、一緒に旅をします。「なぜフィンランドなのか」と質問されたことがあります。『英語ノート』にはなかった。「やっぱりこれ、PISA型ですかね」などと言って深読みする人がいますが、そのようなことは考えていません。大人はフィンランド教育と言うけれども、子どもは、北欧のことを知らないではないですか。それで入れようかなと考えました。だけれども、アレクシー、キム・ソヨン、マリアという名前が、間違っているとまずいので、大使館を通して調べて名前を付けています。さあ、この子どもたちは、これからどこへ向かうのでしょうか。もう既に知っている先生もたくさんいると思いますが、先程見た人がいるのですね。どこにいますか。誰ですか。フロア：鬼。

おっしやるとおり「鬼」がいますが、「鬼」のそばに「先生」がいます。子どもたちが「行ってきまーす」と言って、そして、送り出してくれた先生がいます。ここにはさくらの家族がいます。そして、この後ろには、『桃太郎』で出会った鬼がいる。そして、ここに薄っすら見えますか。何ですか。

フロア：富士山。

富士山が、実は薄っすらと描いてあります。ということは、子どもたちが目指しているこの地は、子どもたちが出発をした学校があった、生まれ育ったところです。2年間外国語活動を経験してきた子どもたちには、外国語に出合って、日本語の良さ、改めて日本語の素晴らしさに気づいてほしいと思っています。2年間外国語活動を経験して来た子どもたちには、外国の文化に出合って、日本の文化の良さ、自分たちの住む地域の素晴らしさ、自分たちの身の回りにいる人達への感謝を改めて感じてほしいと思っています。ですので、この『Hi, friends! 2』では、子どもたちが生まれ育った地に戻るという場面設定にしてあります。目的地に向かう周りには、一輪車に乗っている子、楽器の演奏をする子、サッカーをする子、動物園があります。これらも、全て『Hi, friends! 2』で子どもたちが経験する活動です。レッスン1には動物園があり、レッスン3では一輪車に乗ること、スポーツをすること、楽器を演奏することができます。その中を通して目的地に向かうという場面設定にしてあります。

『Hi, friends! 1』と『Hi, friends! 2』が繋がっているということを、子どもたちに分からせてやってほしいと思います。

そして、『Hi, friends! 2』の最後のページです。70 時間目の最後のページには、このようになっています。Who is this girl? Who is this man? This is Sakura. This is Taku. 「さくら」が大きくなって、外国語を使って獣医さんになり、外国語を使って世界の人と動物を助けている姿を描いています。「たく」は、大きくなってサッカーの選手になります。そして、外国語を使って世界の子どもたちにサッカーを教えている場面を描いています。教室にいる子どもたちには、この四角い箱の中に、外国語を使ってどのようなことがしてみたいかを書かせていただいて、これを持って中学校へ行かせてやってほしいと思っています。私は、外国語活動の大きな課題は小中連携だと思っています。21 年度から、「小中連携をお願いします」という話を何度も話しています。なぜかというと、外国語活動で身につける「コミュニケーション能力の素地」というのは、なかなか数値化できないのですね。ところが、この「コミュニケーション能力の素地」は、中学校に行って本格的に英語のお勉強を始めたら、大いに発揮されます。ですから、小学校の先生は、どうぞ小学校でやってきたことを中学校の先生にしっかり伝えてほしい。中学校の先生は、小学校で子どもがどのような経験をしてきているのかを知ってほしいと思います。

でないと、中学校へ入って子どもが発揮するコミュニケーション能力の素地、例えば子どもの具体の姿で言えば、このようなものです。中学校の先生が、「確実に子どもが違う」と言っている。多少分からない英語があっても、我慢して聞き続けようとする。単語をたくさん知っている。ですから、早い段階で自己紹介のスピーチができる。この間、中学校の先生からお聞きしたのは、中学校で自己評価カードというものを時間の最後に書くのですね。そこに書く内容が違って来た。今までは、「英語の発音や、文が言えた、聞いた」「単語が何個書けた」など、そのような技能面を生徒が書いた。しかし、外国語活動を経験して来た生徒たちが書く内容は、「相手のこんなことが分かった」「英語を使って何かを知って、相手のこんなことが分かった」「こんな様子が分かった」ということを生徒が書くようになった。「これには驚いた」と。

そのように生徒が書けるようになるためには、その先生が、小学校の外国語活動のことを重々理解して引き継いだからだと私は思うのです。確実に子どもたちが変わってきた。中学校の先生が小学校でやっていたことを分かって指導するか、しないかで、この子どもの変容が、生かされたり、消されたりしてしまう。随分中学校の先生の意識が変わってきたと思っています、今。なぜなら、目の前の子が違うから、先生は変わらざるを得ない。私は小中連携が課題だと思っているので、ぜひ『Hi, friends!』の中で、中学校で使えるような紙面作りにしたいと思っていました。今日は時間がなくてそこまでお話できませんが、お手元の資料の後半の部分に書いてあります、小中連携については。後半のはじめの方には、学習指導要領に書かれている小中連携の部分を全て抜粋してあります。これだけ学習指導要領にも、小中連携が大事だと書かれているということです。私は、「学習指導要領に書かれてるし、やってや」と言っているのではないのです。ただ、書かれているという事実は知っておくべきです。中学校の先生も小学校の先生も。しかし、その具体を言わなければいけないと思っているので、その具体は、『Hi, friends!』の中にたくさん入っています。中学校で使える紙面作りを

随分しています。とっくりと『Hi, friends!』を見てほしいと思っています。

さあ、『Hi, friends!』の中身に入ります。今からレッスン3を取り上げて、この1単元の説明をします。Let's Play が必ずあります。1 単元の中に必ずあります。Let's Listen が必ずあります。次に、レッスン3の3, 4 ページ目です。必ず Let's Chant があります。あるいは Let's Sing, 歌があります。そして、必ず Activity が入っています。どの単元にも、今言った4つの活動を設定しています。今、言った4つの活動ですが、お手元の資料の4ページに記しています。この4つの活動が、必ずどの単元にも設定されていて、後半に Activity になるようにしてあります。スピーチという活動もありますが、それほどスピーチばかりに偏らないようにしたつもりです。

この4つの活動が設定はされてはいるのだけれども、実は『Hi, friends!』のテキストだけで授業を進めると、活動が非常に少ないと思う先生がたくさんいらっしゃると思います。文部科学省のホームページには、17 単元分の単元計画を載せています。70 時間分の指導案を1時間1枚で載せているので、これをじっくり見てほしいと思っています。例えば、レッスン3の1時間目には、指導案ではこのような目標が設定してあり、5つの活動が設定してあります。指導案に記載されている【P1】は、Let's Play 1 のことを指します。【L】は、Let's Listen を指します。【P2】は Let's Play 2 を、【C】は Let's Chant を指します。【P】や【C】の代わりに、「○」印のついた活動があります。例えば、「キーナンバーゲーム」です。この活動は、テキスト紙面には載っていません。なぜかという、この「キーナンバーゲーム」は、テキスト紙面を使わなくてもできる活動だからです。【P】や【L】が書いてある活動は、テキスト紙面を使う活動ですが、「○」印の付いた活動は、テキスト誌面を使わない活動です。

先ほど、『Hi, friends!』のコンセプトについて話しましたね。外国語活動だから、活動に使うための教材にしてあります。活動で使うための教材なのだから、この紙面を使わない活動については、紙面には載らないということであり、イラスト的なものは載らないということです。ですので、このテキストの紙面だけを見たら活動を少なく感じますが、指導案や単元計画をじっくり見ていただいたら、活動があるということがわかりますね。

次に、もっと大枠の話をしていきます。今は1単元の話をしてきました。実は『Hi, friends! 1』の9単元分のタイトルと各単元の特色例をスクリーンに映します。それぞれの単元にはそれぞれの特色があります。今お手元の資料に記載してあるのは、特色例です。他にもたくさん書きたいのだけれども、書くスペースがないので、1つ例をあげて書いています。『Hi, friends!』を、『英語ノート』のときと同様にアレンジしてくださいと言っています。「学級の実態に合わせて作り変えて」と言っています。ということは、「どの単元からやってもいい」ということです。「単元を入れ替えてもいい」ということです。あるいは、「9単元を6単元に減らしてもいい」ということです。例えば、レッスン6の「What do you want?」は、アルファベットの大文字を題材にしてあり、『Hi, friends! 1』では5時間設定ですが、児童の実態に合わせて4時間にすることも考えられるわけです。

しかし、年間計画は、意図があってレッスン1があって、レッスン2があって、レッスン3があるのです。レッスン1があるからレッスン2がある、レッスン2があるからレッスン3がある、レッスン3があるからレッスン9があるのです。何がしかが

繋がって単元が配列されています。『Hi, friends!』では、作成者の思いとしては、レッスン1で初めて外国語に触れるまだまだ外国語のことが分からない中で、相手に伝えたいけれども伝わらない、どうしたらいいのか。では、レッスン2でジェスチャーという手段がある、そのようなことに子どもに気づいてほしいと思うから、早くにジェスチャーを題材にした単元を年間計画に入れている訳です。単元それぞれを関連させながら、単元の配列を決めています。ですから、先生方が入れ替えたり、どこかを外したりするのは自由にやってもらった方がいいのですが、お作りになった自身の年間計画で、きちんとレッスンとレッスンの関係づけをしてほしいと思っています。この配列は、『Hi, friends!』を作ったこちらの思いで配列しています。しかし、これが正しいとは言っていない。ですので、作り変える時に、どうぞ単元と単元の間を意識してほしいと思っています。

何が言いたいかというところ、「1単元で、子どもにすぐ力などつきにくい」ということです。ましてや1時間の活動であれば、すぐつかないです。1年間でどのような子どもを育てるのかを描く必要があります。1年後に、「3月にはこのような子どもになってほしい」という思いがあって、単元を順番に並べるのでしょう。長いスパンで子どもの力をとらえてほしいし、子どもに力をつけられるように活動や単元を仕組んでほしいと思っています。単元と単元の間を意識してください。

『Hi, friends! 2』も同じです。それぞれ関連性をつけています。例を挙げます。レッスン4で「道案内」ですね。レッスン5で「Let's go to Italy. 行ってみたい国」と、このような順番になっていますが、この間ある学校に寄せてもらったら、これが入れ替わっていたのです。先に「行ってみたい国」の単元をしていて、その後の「道案内」の授業を拝見しました。非常に面白い授業だったのです。どのように面白かったかというところ、「道案内」は結構難しいのです。『Hi, friends! 2』には、子どもが全然知らない町が出てきますね。『Hi, friends! 2』に鳴門の町を載せたら、他府県の先生方は、困らします。そのように1つだけ選べないので、架空の町にしてある。ですから、先生方は、アレンジされる時に、『Hi, friends! 2』の中に出てくる駅ではなくて、自分の町の駅の絵カードにされたり、自分の校区にある本屋さんの写真を撮ってきて絵カードにされたりしている。そのような教材を使って、この単元の授業をされている授業をよく拝見します。

また、授業の活動は、体育館に机を置いたり、ポールを立てたりして、町を体育館などに作られるのです、それはそれでいいのです。だけれども、「なんか盛り上がりがないよな」という気がいつもしていた。そうしたら、ここを入れ替えて、先にレッスン5で子どもが自分の行きたい国を調べて、自分で行きたい国の地図を勝手に作っているのです。例えば、フランスだとエッフェル塔とモンサンミッシェルが隣り合わせになるなど、「そなん、君、あかんで」と思うけれども、そのような地図を子どもたちが思いをのせて作っている。なぜかエッフェル塔の横にパン屋さんがあるなど、自分で好きなようにフランスの国を作っているのです。調べてきたもので。消防署や警察署も、地図に載せてあります。そして、それらに別の白いカードで蓋がしてあり、隠してあるのです。

活動では、子どもたちそれぞれにフランスの国旗、アメリカの国旗、韓国の国旗などをつけて、その国のブースにしています。クラスを半分に分け、半分の子がブース

のところへ行く。例えばフランスの国のブースでは、子どもが作成したフランスの地図をもっている。そこに、一人の子がブースにあるフランスの有名な建物などの写真の一つをさして、“What's this?”と聞くと、ブースの子は、“It's ~.”と言う。相手が、“Where is ~?”と聞くと、“OK.”と言って、その地図で説明してあげる。“Go straight. Turn right.”などと言って道案内をする。その地図をたどって行って蓋になっているカードを開けると、「ほんまや、エッフェル塔やった」と言って、エッフェル塔のカードを貰えるという仕組みです。子どもが非常に面白い。いろいろな国のことが分かる。自分の調べた国のことを紹介する。フランスの地図を作っている子どもは3～4人いるけれども、みんな地図が違うんです。それが面白くて、非常に子どもの「言いたい」「聞きたい」という気持ちが高まり、盛り上がった。例えばそのように、意図を持って入れ替えていただくといいですね。子どもが自分の地域はもう知っているし、案内は要らない。それよりも、自分たちが調べた国の、その地図で道案内をしようと先生方が考えられて、入れ替えられた。そのような具合に、意図的に繋がりを考えてやっていただくと、非常にいいかと思います。

最後にもう一つ、この『Hi, friends!』に込めた思いです。肝となる単元を幾つか設定しています。どれもこれもに思いは込めてはいるのですが、『Hi, friends! 2』の中に、非常に思いを込めた単元が2つあります。1つは、レッスン7の「We are good friends.」という桃太郎の劇の単元です。もう1つは、レッスン3の「I can swim.」の単元です。実は、文部科学省では、先生方が外国語活動をもっと自信をもってご指導していただけるようにと、授業のDVDを作りました。もう学校に、お手元に届いていますね。見ていただきましたか。見てくださいね。今日、その授業のDVDの6年生で授業してくださった林崎小学校の中妻先生がおいでなのですが、中妻先生がちょうど「I can swim.」の単元の授業をおやりなりました。最後に、その単元のお話をして、私のお話を閉じたいと思います。

『Hi, friends! 2』の中では、“Can you play soccer?” “Yes I can.” “Can you play baseball?” “No, I can't.” “Can you play kendama?” “Yes, I can.”など、たくさんの表現が出てきます。子どもは、そのようなことをお互いに言ったり聞いたりしながら、最後に自分ができること、できないことを紹介したりするという活動を設定していますが、『Hi, friends! 2』の後半のActivityには、“This is me.”という紙芝居を入れています。男の子と女の子が会話をしています。女の子が男の子に“Can you play soccer?”と尋ね、男の子は“No, I can't.”と答える。“Can you play kendama?” “No, I can't.” “Can you run fast?” “No, I can't.” “Can you clear hachidan?” “No, I can't.” “Can you ride a unicycle?” “No, I can't.” “Can you cook?” “No, I can't. I can't”

すると、女の子が男の子に、“Yes. Yes, you can. You can help me.”私がひとりぼっちだったときに声を掛けてくれた。雨が降って、傘がない時に、傘に入れてくれた。私が本をたくさん持っていて重そうにしていた時、手伝ってくれた。“You can help me.”と声を掛ける。すると男の子が、“Yes. Yes, I can help my friends. I can help people.”荷物をたくさん持って困っていたお年寄りに声を掛けられた僕。ごみが落ちていて、拾った僕。電灯がつけっぱなしになっていて、電灯を消した僕。水道の蛇口が開きっぱなしを閉めた僕。僕は、サッカーやテニス、野球、八段跳びなど、そんなことはできないけれども、ふっと周りを見たら、何も特別なことをしなくても、僕がい

るだけでできることがたくさんある。「僕ってすごい存在なんやな」。そして、男の子は言います。“I can save the Earth.”

環境破壊のことだけではなくて、この地球には、人が人の命を平気で奪ってしまうという戦争がまだまだある。そのようなことをやっていたらだめでしょう。私たちは、たまたま日本に住んでいて、たまたま韓国に住んでいて、たまたま中国に住んでいて、たまたまアメリカに住んでいる。国際理解という、「国」という字が書いてあるから、どうしても国で線引きをしてしまう。だけれども、直山という文化と坂田という文化がある。直山という文化と佐藤という文化がある。異文化理解です。国際理解というのは国という字が書いてあるから、みんな国のことばかりを思うかもしれないけれども、1人ずつが理解し合うことが国際理解ではないかと強く思っています。ですから、この紙芝居では、男の子が「自分がいるだけで、できることがたくさんあるんだ」と気づいていくというストーリーにしてあります。“can”を「できる」という言葉で置き換えてしまうと、そのような薄っぺらい「できる」ではない、もっと深いものをこの単元で子どもに分かってほしいと思っています。

中妻先生の DVD の授業では、この単元の前のお誕生日のところで、バースデーカードをお互いに渡し合いっこをした。そのバースデーカードに、「あなたのこんなところが素敵」ということを書いたのですね。そうしたら、「あなたの笑顔が素敵」と書いてもらった子がいる。何も特別なことではない。そうしたら、この「I can swim.」の単元でその女の子は、最後のスピーチで“I can make people happy.”と言う。私は、「あなたの笑顔が素敵」と書いてもらった。私がいるだけで周りの人を幸せにできる。そのような自分に自信をもって、最後にスピーチをみんなの前でします。そのような様子が DVD に出てきます。外国語活動を通じて子どもが敢えて外国語に触れることで、日本語の良さ、日本の素敵さ、自分の身の周りにいる人の素敵さ、そして、自分の素敵さに気づいて、自分が生まれてきたことを喜べる。そのような子どもに、大人になってほしいと思って、この「I can swim.」の単元を作っています。どうぞ先生なりに「I can swim.」を料理していただいて、目の前の子どもに合うようにアレンジをして、授業を作ってほしいと思っています。

小中連携のところについて十分お話ができないままで、申し訳ありません。紙面の方で7, 8 ページのところ少し書いています。また、8 ページのところの最後には、今申し上げたようなお話も含めて、『初等教育資料』という文部科学省が毎月発行している月刊誌の2月号と5月号で、また来年の2月号にも特集を組みますので、ぜひ読んでいただけたらと思っています。では、時間がきましたので、これでお話を終わります。お疲れ様でした。